史跡･銘板･木柱･石柱

広内国民学校跡

銘板　旧狩勝トンネル

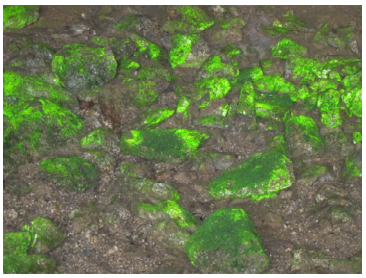
設置：平成2年(1990)11月　位置：国道38号線6合目付近南側（新内トンネル）

史跡　旧　狩勝隧道・新内隧道

官設鉄道十勝線(旧狩勝線)は、北海道開拓と軍事上の必要性から、明治34年４月、落合ー新得間27.9キロメートルが着工された。２か所の隧道(トンネル)掘削工事を含め、その鉄路建設工事では、枕木の数ほど犠牲者が出たと伝えられている。総工費は、狩勝隧道(954メートル)が、34万4000円、新内隧道(124メートル)は4万2300円を要し、トンネルの掘削工事は、固い岩盤と湧水のために困難を極め、ついには人柱まで建てて工事の進捗を図ったとも語り継がれている。明治38年１月隧道は完成し、明治40年９月８日十勝線(旭川～帯広間)は開通をみたのである。以来、十勝線は釧路本線、根室本線と名称を変えながらも、道央と道東を結ぶ幹線としての地位を歩んだのである。しかし冬季間隧道内の湧水は氷結するなど内壁 の老朽化も激しく、しかも、千分の二十五という急勾配が連続する同線は、経済の発展とともに、旅客・貨物輸送の効率化のため、昭和41年10月１日開通の新狩 勝線にその役目を譲ることになり、60年の歴史を閉じたのである。

平成２年11月

調査・撰文　新得町郷土研究会
写真提供　大崎和男氏
新得町教育委員会



【注記】

国道38号線6号目付近の沢側の林道を約200メートル程進み、他の林道と交差する地点に中間案内板がある。そこから旧狩勝線跡に出て、線路跡沿いに約250m進むと新内トンネルに到達する。

平成21年(2009)には、経済産業省の近代化産業遺産にも選定されている。

また、平成22年(2010)10月には、トンネル内でヒカリゴケの群生が見つかっている。

銘板　佐幌岳・石切山の由来

設置：昭和61年(1986)10月　位置：新得町字新内梅園内　旧国道沿い

佐幌岳・石切山の由来

佐幌岳（一〇五九・五メートル）中腹に、石切山がある。明治三十四年、落合～新得間、官設鉄道工事が着工されたが、旧狩勝線全長二七・九キロメートル。新内在住の関新太郎氏が、明治三十年に開発した山で、花崗岩層高一・二メートル（七十尺余）、巾二・二メートル（四十尺余）、石材を供給するため、新内鉱山の構造物である。

新得町内の鉱山は、鉄道工事の新越トンネル入口や駅ホーム、線路擁壁等の他、佐幌川護岸、市街地の土留、神社の手洗鉢と狛犬、忠魂碑、森本宮司・記念碑・新内小学校の門柱などに使用されている。

新得寺には祖師萬丈和尚碑、新得駅長尺足修羅大木を運ぶそりに積み・石材（大石や舟を引き上げるときなどに使う、ろくろ）が、貨車輸送寄せられた。

神楽算（ろくろ）で巻き寄せながら、新内駅まで運ばれた。

海市北海道旭川市鳥豊平橋と釧路市幣舞橋・旭川神居笠石は、道内の建造物に使用され、札幌市北一の宮・札幌長さ七・二メートル（二十四尺）の二本取り二本を送り出し奉建する。これにより四太郎の佐幌岳石切場の名は、道内外に名声を高めた。

旧太樺太庁から五・五メートル（十八尺）の記念碑なの発注を受け、新得町用材を縦横に地に供給し、各地に記念碑・忠魂碑・顕彰碑などの発展に寄与した。

大きな産業と文化の構造物が生産された。佐幌岳石切山は、全国にその名が伝えられたが、戦後の大きな経済変動により、昭和二十八年閉山となる。その後、八十年の事業の再開が試みられ、昭和三十九年に、再び閉山となった。

昭和61年に採算に乗らず、材質の優秀さを惜しまれながら、営業に、白く一角の見えるこれが、その西方・中腹約二キロメートル先に、石切山採石場である。

昭和六十一年十月

新得町教育委員会
新得町郷土研究会調査

【注記】

石切山の現場は、国道38号線6合目付近から北西2kmあたりであるが、銘板設置場所は、石切山が遠望できるこの地点を選び設置した。平成20年(2008)5月には、郷土研究会が石切山の現地調査を実施している。

銘板　狩勝旧国道の桜並木の由来

設置：昭和63年(1988)5月　位置：新得町字新内　梅園内旧国道沿い

明治四十年　鉄道開通により、狩勝の展望は有名であったが、昭和二年「日本新八景」に選ばれ全国的に時代の脚光を浴びた。
　昭和六年、新内ー落合間に道道が開さくされ、翌年新得ー新内間の既設村道が改修されて景勝地狩勝超えの自動車道の開通は、住民の大きな喜びであった。
　当時、青年団は十一分団に分かれていたが、各団こぞってこれを契機に愛郷心の培養と、集団訓練の目的のために、団員自掘りの苗木を持ち寄り、昭和七年・八年の春、約四〇〇本の桜を新内駅から峠に向けて植えたものである。
　成長した桜は標高差のため、一か月程の遅咲きとなり通行人を楽しませたが、今は交通量増大による新道改良のため、旧道に断続的にその形態を留め、さらに数十年の歳月に耐え、古木となり、当時の青年も又白髪を頂く…
　ここに先輩の事績をたたえ、後世に伝えようとするものである。

昭和六十三年五月一日

新　得　町
新得町郷土研究会　調査

【注記】
　この一帯には、梅林、コマクサ園、文学の散歩道などがあり、5月 中旬になると桜と梅が、時を同じくして咲き、町民の憩いの場となっている。

銘板　石碑　松浦武四郎野宿之地

設置：昭和62年(1987)10月　位置：新得町字新内西6線185番地（一の沢）

松浦武四郎野宿之地

函館奉行から東西蝦夷地山川地理取調の命を受けた幕末の探検家松浦武四郎は、安政五年（一八五八年）六度目の蝦夷地入りをし、同年三月十三日（太陽暦の四月二十六日）に残雪きらめく狩勝国境を越え、新内の一の沢を下ってこの地に足を踏み入れた。和人としては、初めての狩勝越えである。
　同行者は石狩詰下役の飯田豊之助と案内のアイヌの人十人、函館を出発して五十日目、ときに武四郎四十歳であった。
　武四郎が書いた当時の記録「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」によると、一の沢が合流する付近の佐幌川は川幅が七・八間（一間は約百八十センチメートル）平盤一枚岩で急流。左岸を行くにも切り立っていて進むことができず、やむなく佐幌川を右岸に渡り、大笹原を三、四丁（一丁は百九メートル）分け入りてトドマツの多いこの地に野宿したとある。翌日は曇りのため急いで出発し、佐幌川を下りパンケシントク川の合流地点（現新得市街）から進路を左にとり十勝川本流のカムイロキ（屈足34号）に出て、流域を踏査しつつ、三月二十一日にヲホッツナイ（大津）に到達している。
　ここより東へ二百七十メートルの佐幌川べりが武四郎野宿の地である。

昭和六十二年十月

新　得　町
新得町郷土研究会　調査

【注記】
　佐幌ダムより約6km上流の林道沿いに銘板が設置してあり、そこから東の方向約270m程に石碑がある。

銘板　新内小学校

設置：平成3年(1991)11月　位置：新得町字新内西1線142番地

旧　新内小学校由来　（平成３年修復）

ここ新内小学校は、昭和８年１１月、南新内・北新内尋常小学校を統合し現在地に開校した

佐幌岳の麓、新内地区の開拓は明治３６年頃始まったが、空を覆う原始林を切り開き、熊笹の根張る大地を一鍬ひとくわ耕す開拓移住者の悩みに、その子弟らの教育があった。また、明治４０年十勝線の開通により林業・鉱産物の集積地として移住者も増え教育施設の必要性がたかまっていった。

南新内尋常小学校は、明治４０年９月、新得簡易教育所新内特別教授場として字新内西５線１２５番地に開校、地域住民の熱意と理解のもと、新内教育所として独立、二度にわたる校舎新築移転を経て、大正６年南新内尋常小学校と改称された。この年の児童数は４０名を数えていた。

北新内尋常小学校は、明治４２年青森・宮城・石川の団体入植により字新内西６線１７５番地に新内教育所付属北新内特別教授場として開校、大正６年北新内尋常小学校に昇格した。

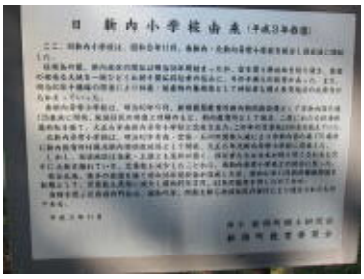
しかし、当該地区は気象・土壌とも条件が悪く、移住者たちは立木が伐り尽くされると次々に土地を離れていき、児童数も減少したことから、南新内尋常小学校との統合に至った。

統合以来、幾多の変遷を経て昭和３６年現校舎が落成したが、昭和４１年10月新狩勝線開通を転機として、児童数も急激に減少し昭和４９年３月、６７年の歴史を閉じたのである。

当時を偲ぶ花崗岩の門柱は、昭和９年、関新太郎ら地域住民の寄付により建立されたものである。

撰文　新得町郷土研究会

平成３年１１月　新 得 町 教 育 委 員 会



【注記】

昭和8年(1933)南新内と北新内尋常小学校の合併に伴い開校された。同32年(1957)に屋内体育場を、同36年(1961)には校舎が改築されたが、同49年(1974)3月に閉校となった。

その後、教室などは新内ホールとして催事等に、屋内体育場を郷土資料の収蔵庫として改修し利用されている。

銘板　急行「まりも号」事件 現場

設置：昭和60年(1985)11月　位置：新得町字新内西4・5線間130番地（下新内川鉄橋）

昭和二十六年五月十七日　釧路発函館行急行四列車（愛称「まりも号」）は、新得駅を午前一時十五分、四百七十余名の旅客を乗せ発車、十分後の午前一時二十五分、機関車は激しい衝動とともに脱線し、急停車ブレーキにもかかわらず、約二十四、八メートル進行し、上新内鉄橋を越え、築堤左側へ機関車は宙吊りの形で横転してしまった。機関士は軽傷を負ったが、乗客は幸い全員無事であった。

現場は、ここより旧新内駅に向って九五〇メートル鉄橋のある地点で線路左側は防雪林、右側は原野の人気のない所であった。

非常連絡により、自治体新得警察は、直ちに関係方面への応援を求めながら、捜査の結果、左右の継目板四枚を金切鋸で切断し、白樺の棒を差し入れ、レールを四センチメートル食い違わせてあったことが、直接の原因と判明した。

戦後における、下山、三鷹、松川の国鉄三大事件及び昭和二十三年四月の狩勝トンネル争議等の背景もあるためか、捜査は広範囲にわたり、容疑者約六百名の調査が行われたが決めてなく、遂に迷宮入りとなる。

自治体警察廃止の端緒ともなった不可解な「まりも号」転覆事故ではあった。

ここに新得町史に残る大事件のてん末を記すものである。

昭和六十年十一月　新得郷土研究会調査　新　得　町

【注記】

旧狩勝線を利用して整備された「狩勝ポッポの道」の途中に架かる「まりも橋」付近に、事件現場の銘板が設置されている。また、その先のバッタ塚へ通ずる道との交差点には、事件の詳細を記した銘板が設置されている。

石碑

苦闘之碑

設置:昭和58年(1983)5月　位置:新得町字新内西5線140番地(狩勝高原遊園地)

由来

石狩と十勝を境とする狩勝峠は、眺望万里日本新八景の一つと謳われ明治の文豪国木田独歩も激賞を惜しまなかった景勝地である。

蛇行続く鉄路旧狩勝線は、明治三十四年四月落合ー新得間二十七・九キロが着工された。総てを人力に頼る工事には常時一千余名の人々が働き、特に百二十四メートルの小トンネル、九百五十三・九メートルの大トンネルの掘削には、土工労働者の人柱があったと伝えられている。

またこの工事に従事した土工労働者の多くはタコと呼ばれて酷使され、想像を絶する苦しみの中で死んでいった人もいて、その屍はこの沿線に埋没されていると語り継がれている。

艱難辛苦血と命を注いだ難工事も着工以来六年有余を経て、明治四十年九月八日遂に道東道央間が鉄路で結ばれ、我が新得町は産業経済発展の夜明けを迎えた。

私共町民は、この地で潰えた土工労働者のことなどを忘れてはならない。その礎の上に本町は歩んで今日に至っている。

時は流れ、旧狩勝線鉄道は昭和四十一年十月一日新狩勝線鉄道の開通によって、北海道開拓の大役を果し、今はこの山脈に深く眠っている。

町制施行五十周年を機に、これら鉄道建設で苦闘の末殉じられた土工労働者各位の霊安らかなれと祈りつつ

昭和五十八年五月一日建立

新得町

【注記】

明治34年(1901)から同40年(1907)9月８日の開通までの間、道央・道東を結ぶ官設鉄道十勝線の建設工事において、特に狩勝トンネルは最大の難工事で、数知れぬ犠牲者が出ており、虐げられ、葬られたタコ労働者の霊を慰めるため、新得町町制50周年記念として建立された。

木柱

バッタ塚の歴史

設置:平成17年(2005)　位置:新得町字新内西2線～3線130番地一帯

バッタ塚の歴史

明治十二年に始まり、十八年に終わりをつげたバッタの大発生は、わが国の虫害史上類例のないものです。

翌明治十三年八月にも河西、中川両郡にトノサマバッタの大群が発生し、日高から胆振に入り、一群は海岸沿いに虻田方面に、一群は札幌方面を襲いました。

突如、大風が林の木をゆり動かす様な音がすると、みるみるうちに数百万数千万のバッタが飛び回り日食のように太陽がかげったり、地表は見渡す限りバッタでおおわれて、足の踏み込む余地もありませんでした。しばらくして、バッタの去った跡は青いもの一つ見当らず、一面はぎ取ったような赤土となって、作物はもちろん、外に干してあった衣類までも跡形なく食いつくしたという異状な光景でした。

バッタは、明治十四年五月にも発生し、その勢いは、前年に倍するものがあり、被害もはげしくなったので、開拓使は駆除費を計上し防除に努めたがバッタの害はさらに明治十七年までつづき、防除費も年々増大していきました。

新得町での駆除は、明治十七年六月一日から同年八月十四日にかけて行われました。発生地は、佐幌岳山麓と佐幌川流域に集中していて、このとき駆除したバッタの成虫や卵を埋めたものがバッタ塚として残されています。

バッタの害は五年間つづきましたが、明治十七年全道的に長雨が降り、バッタの卵がふ化せずに、腐ったためようやくバッタ騒動も終りをつげました。これが歴史的な大バッタ害のあらましです。

これから先、歩道の両脇にある大小不同の土盛が、当時バッタの死がいを埋めたためできたといわれているバッタ塚です。

（新得町百年史より）

【注記】

バッタ塚へは、狩勝峠新得チェーン着脱場から入ることができ、丘陵を進むと左右に点在している。

塚の数は70数個で高さ1.2mの土盛で直径が4～5mの半円形に造られていたというが、現在では造林などで一部分しか残っていない。

木柱　新内駅逓所跡

設置：平成12年(2000)10月　位置：新得町字新内西5線135番地付近

新内駅逓所跡

由来　明治四十年鉄道の開通、新内北東部の開拓と道路開通などにより、福本義雄を取扱人に命じ開設した

開設　昭和四年十月二十九日・廃止　昭和十三年九月十三日

地番　新得町字新内西五線一三五番地付近

設置　平成十二年十月二十日　新得町郷土研究会

【注記】明治40年(1907)9月、待望の十勝線落合～新得間が開通したことにより、北新内や東新内などの開拓が進展、さらに昭和2年(1927)、狩勝峠が新日本八景に入選したことから、新内地域を往来する旅人が増加した。当時の村長佐藤伊久馬は、旅人の便を考慮し、河西支庁(現十勝支庁)に駅逓所の請願を起こし、昭和4年(1929)10月に官設の新内駅逓所が新設された。

取扱い人は、福本義雄があたり、官馬1頭、私馬4頭、馬車1台、建物50坪を有していた。しかし、奥地開拓の落ち着きと鉄道利用の増加などから、昭和13年(1938)9月、その使命を果たし廃止された。

石柱　北新内尋常小学校

設置：昭和62年(1987)11月　位置：新得町字新内西6線175番地

北新内小学校跡

由来　自　明治四十四年四月二十四日　至　昭和八年九月三十日

明治四十二年から青森、宮城、石川県より入植、北新内特別教授場として、児童数三十名で開校したが、離農者が相次ぎ、新内小学校に統合された

設置　昭和六十二年十一月三日　新得町教育委員会　新得町郷土研究会

【注記】

佐幌岳東北山麓に、明治42年(1909)から青森、宮城、石川の各県から開拓者が入植し、同44年(1911)に新内教育所所属北新内特別教授場が、児童数30名で開校した。開校はしたものの道は刈分け道で、子供たちは、笹の茎でよく怪我をしたという。しかし、土地条件が非常に悪く、次々と離農する者が増え、昭和8年(1933)8月31日をもって閉校となり、新内尋常小学校に統合された。

石柱　南新内尋常小学校

設置：平成17年(2005)10月　位置：新得町字新内西3線138番地

南新内尋常小学校跡

明治四十年九月十一日　字新内西五線一二五番地に開校
大正三年五月二十二日　字新内西三線一三八番地に移設

昭和八年十一月十六日　南、北新内尋常小学校を併合し、
新内尋常小学校に改称　字新内西一線一四二、一四四番地に移設

設置　平成十七年十月
新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】　明治40年(1907)の十勝線の開通と同42年の新内駅の設置により、鉄道、石材開発、林業者等の移住が急増し、同40年9月12日新得簡易教育所付属新内特別教授場は開校した。大正６年(1917)頃には児童数40名に達したという。通学区域は新内市街と同南地区及び東地区の学童が通学しており、運動会は北新内尋常小学校と交替で行われていたが、昭和8年(1933)9月、新内尋常小学校に統合された。

石碑　新得小学校林地の碑

設置：昭和56年(1981)10月４日　位置：新得町字新内

新得小学校林地

寄贈者　　故 仲田市太郎殿

この学校林地は、本町で医院を開業していた同氏が
地域子孫百年後の隆盛を祈願し、大正十三年三月
字新得西四線五十番地の造林地５haを寄贈された
もので、その後、北海道立新得畜産試験場用地と
なったため、現地に移転したことをしるし建立する。

昭和五十六年十月四日建立　　新得町

【注記】
仲田市太郎は千葉県出身の医師で、大正8年(1919)に町内で仲田医院を開院。診療の傍ら、新得の山林が乱伐されていることを憂い、私費を投じ自力で土地を確保し、カラマツの苗木を育て植樹に励み、土地の小中学校、神社、寺院その他公共に寄附をした。この植林事業は、後の林業振興に大きな功績を残した。石碑の裏には仲田氏が林地を寄贈するに当たって活用法の希望を述べた「造林地寄附ニ関スル希望」の文章が仲田氏の字体のまま模写されている。
また、石碑への階段は、平成19年(2007)に二女の飯塚ちどり氏が寄贈したものである。

新 内 神 社

位置：新得町字新内西3線142番地

祭神は猿田彦大神で、明治43年(1910)に創建された。

神社は、新内教育所(南新内尋常小学校の前身)近くの字新内西3線142番地の公有地に建立された。

昭和に入り、新内駅前の市街地西に移されたが、神社は松林に囲まれ、境内には土俵もあった。

市街地には鉄道官舎を含め、多いときには50戸近くの住居などが並び、神社境内は、近くの鉄道引き込み線とともに子どもたちの遊び場であった。

例祭日は、札幌祭りと同じ6月15日で、秋祭りも行われ、子ども相撲なども開催されていたという。

昭和41年（1966）10月、新狩勝線開通により新内駅が廃止され、それとともに市街地から鉄道官舎がなくなり、さらに離農者も出て、新内市街地の衰退とともに、新内神社も廃止された。

祭神は、新得神社に合祀されている。

新内神社の鳥居

昭和55年(1980)8月撮影

写真提供：三塚　幸男

八 幡 神 社

位置：新得町字新内基線155番地

字新内基線155番地の小高い山の頂上(標高384m)に大正5年(1916)頃、既に祀ってあったという。当時よりこの山は、開拓者の草刈場として利用されていたが、昭和17年(1942)9月頃、現在地である山のふもとまで下げた。

祭神は、八幡大神・稲荷五柱大神で、碑石のほか、神殿、鳥居一基があるが、腐朽が甚だしい。

例祭日は、4月15日・9月10日であった。

現在は、畜産振興公社用地内にあり、廃社の状況にある。